

HELLO

ハローインタビュー



元プロ野球選手・現起業家『アジア甲子園』主催 しばたしょうご 柴田章吾さん

【プロフィール】

愛工大名電高校、明治大学を卒業後、読売ジャイアンツでプレー。難病「ベーチェット病」を公表した初の元プロ野球選手であり、アクセンチュア出身の起業家。

現在はシンガポールを拠点に、国際大会『アジア甲子園』の主催や、PR・キャスティング事業、さらにSJ60公式認定事業の『スポーツカンファレンス』を企画・運営するなど、複数のグローバルイベントを展開する企業を経営。

また、BCG (Boston Consulting Group) やマッキンゼー出身のプロフェッショナル約30名からなる、スポーツ・エンタメ・BtoC領域に強みを持つ戦略コンサルファーム『SHAPE Partners』のCSOを兼任。日本とシンガポールに拠点・人員を揃え、アジア市場での新規事業開発やブランディング向上など、アジアでの次の一手を狙う企業の戦略的パートナーとして活動している。

(取材日: 2026年4月16日)

聞き手

日本人会広報部部長
藤本直哉

— まず、柴田さんのこれまでのご経歴と現在のお仕事について教えてください。

柴田さん 大学卒業後、読売ジャイアンツで3年間プロ野球選手としてプレーしました。その後、1年間は球団職員としての勤務を経て、外資系コンサルティング会社のアクセンチュアに転職し、3年半ほど働いた後に独立しました。現在は、スポーツやエンターテインメントのコンテンツをアジアに展開する仕事をしています。その代表的な取り組みが『アジア甲子園』です。加えて、戦略コンサルティングの仕事も行っており、日本とシンガポール

SJ60特別インタビュー



SINGAPORE - JAPAN
DIPLOMATIC RELATIONS
1966 - 2026

で働く約30人の仲間とともに、スポーツ・エンターテインメント企業のアジア戦略やファン拡大、キャラクターやブランドの展開などを支援しています。

— アジア甲子園がスポーツ庁長官感謝状を授与されました。受賞をどのように受け止めていますか。

柴田さん 始めた時には、まったく想像していませんでした。アジア甲子園は最初の頃は「柴田君が一人でやっていることでしょう」と言われることも多く、個人の活動だと思われがちでした。でも実際には、組織として取り組んでいます。甲子園という名前を使うにあたっては阪神電鉄さんに許可を取り、正式なプロジェクトとして進めています。今回の感謝状によってそうした点が認められたことが嬉しかったです。



藤本広報部部長

— なぜ東南アジアで野球に取り組もうと思われたのでしょうか。

柴田さん 結論から言えば、自分が活躍できる場所を探したら東南アジアだった、ということです。スポーツや野球には引き続き携わりたいという思いがあり、野球の良さをもっと海外の人に知ってほしいとも考えていました。その時、すでに野球が広く普及しているアメリカのような地域ではなく、まだ野球が確立していない場所で挑戦したいと思いました。さらに、日本に親しみを持ってくれる国が多く、市場としての可能性もある地域を考えると、東南アジアが自然な選択肢でした。

— 改めて、アジア甲子園とは、どのような大会ですか。

柴田さん 日本の甲子園は、47都道府県の代表校が集まり、日本一を決める高校野球の大会です。アジア甲子園は、そのアジア版を作りたいという発想から生まれました。U18 (高校生世代) の選手たちが、アジアで一番を目指す大会です。現在はまだ3年目で、東南アジアを中心とした5カ国が参加する規模です。しかし、将来的には、東南アジアにとどまらず、アジアナンバーワ



柴田章吾さん

ンを決める野球大会にしていきたいと考えています。さらに、その大会で優勝した選手たちが日本の甲子園に出られるようにすることが、私たちの大きな目標です。

— 日本の甲子園との連携は、どのように進めているのでしょうか。

柴田さん 日本の甲子園は長い伝統を持つ大会です。そこに海外の選手が出られる新しい仕組みを作ることは、相当難しいことですし、多くの方々の理解と許可が必要です。だからこそ、まずアジア甲子園自体が影響力を持たなければいけません。「アジア甲子園で優勝した選手たちなら、日本の甲子園に出してもよい」と思ってもらえるような大会に育てる必要があります。そのために、日本高等学校野球連盟(日本高野連)さんとも常にやり取りを重ねています。

— アジア甲子園はどのようなきっかけで生まれたのでしょうか。

柴田さん 最初は2016年頃、アジアで野球が広まっていない地域にどうすれば野球を普及できるのかを考えていたことがきっかけです。当時はフィリピンを中心に野球教室を開くなど活動をしていましたが、年に数回の取り組みだけでは大きな変化にはつながらないという課題を感じていました。転機の一つが、漫画『ドラゴン桜』の作者である三田紀房先生との出会いです。偏差値の低い学校生徒が勉強を楽しみながら東大を目指すようになる一見奇抜なストーリーと、それを生むアイデアに関心を持ち、自ら会いに行きました。

そこで三田先生に「じゃあアジアで甲子園をやったらいいんじゃないか」と言われました。高校野球における頂点である甲子園。みんなが行けるわけじゃないけど、子どもから高校生までずっと目指し続ける甲子園のような舞台をアジアにも作るというアイデアをいただきました。それがアジア甲子園のスタートです。

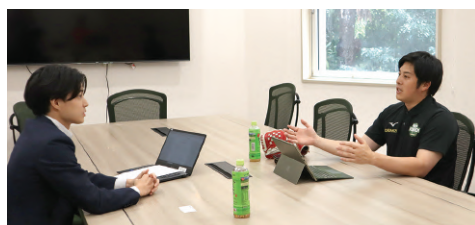
— 新しいことや難しいことに挑戦し続けるきっかけはどこにあるのでしょうか。

柴田さん 中学3年生の時からです。それまでずっと野球をやっている少年でしたが、中学3年生の時に難病にかかり、野球を続ければ失明するか、命に関わるかもしれないと言われました。突然そんなことを告げられ、これからどうすれば自分の人生を楽しく過ごせるのか分かりませんでした。その時、自分の人生を好転させるためには、この状態から甲子園に行ったという結果を出したいと思いました。中学生時代は日本代表にも選ばれていて、甲子園に行ったらプロ野球選手になると言っても、周囲はそれほど驚かなかったかもしれません。でも、このどん底の状態から甲子園に行けば、みんな驚くだろうと思ったのです。そこから試行錯誤を重ね、高校3年生で甲子園に出場しました。無理だと言われることや、周囲が驚くようなことを実際にやる。この経験が、今の挑戦の原体験になっています。

— 東南アジアで野球大会を行う上で、特に大変だったことは何ですか。

柴田さん 甲子園は、日本という野球が盛んな国で行われています。ファンがいて、時期が来れば人が集まり、テレビでも多くの人が見ます。しかし東南アジアでは、野球はまだ本当に盛んなスポーツではありません。まず知ってもらわなければならないし、見に来てもらわなければならない。そのためにはイベントを行い、広告を打ち、認知を広げる必要があります。当然、多くの資金も必要でした。

資金をどう集めるか、どうすれば興味を持ってもらえるか。



インタビューの様子

この二つが大きな課題でした。多くの方々に協力していただき、企業の協賛もいただきましたが、資金集めと認知拡大は、今も継続して取り組んでいる大きなテーマです。

— 第1回から第2回、そして今年の第3回へ、大会はどのように成長していますか。

柴田さん 第1回大会は、インドネシアのチームだけによる大会でした。2年目には国際大会にしたいと考え、3カ国に広まりました。運営メンバーからは「まだ早いんじゃないか」と言われることもありましたが、はじめからアジア甲子園は将来的に東南アジア10カ国、さらにアジア全域へ広げたいと思っていたので挑戦しました。

今年の第3回大会では、5カ国から16チームが参加する予定です。第1回から比べるとチーム数は倍になり、参加国も1カ国から5カ国になります。海外からチームを受け入れると、国内大会にはないイレギュラーな対応も多くなりますが、メンバーも経験を積み、少しずつ大会として成長してきました。



アジア甲子園運営メンバー

— 今年の注目点を教えてください。

柴田さん 大きなニュースとして、今年8月の日本の甲子園で、昨年アジア甲子園の優勝バッテリーが始球式を行えることになりました。これは非常に大きな出来事です。日本の甲子園の開幕戦の始球式は、これまで野球界のレジェンドが務めてきた舞台です。そこにインドネシアの選手が立つことになります。日本の甲子園側も、アジア甲子園がさらに盛り上がりしてほしいという思いから提案してくれました。私たちが目指している『アジア甲子園と日本の甲子園をつなぐ』という未来に、少しずつ近づいていると感じています。

また、日本のチアリーディングや吹奏楽といった応援文化を現地の人に体験してもらう取り組みも続けます。今年も決勝戦では100人規模の応援を予定しています。

さらに今年は、試合後にトライアウトも行います。日本の高校、大学、プロ野球のスカウトに見てもらえる機会を作り、選手たちの次のキャリアにつなげたいと考えています。



吹奏楽の様子

— 大会が選手たちの将来に結びつくのですね。

柴田さん はい。チームとして勝ち上がれなくても、個人として良いパフォーマンスを見せれば、その後の面談や進学につな

がる可能性があります。実際に、大会の卒業生の中には日本の大学野球部に進んだ選手もいます。その選手たちに日本で活躍してほしいですし、そうでなくても将来母国に戻り、野球を伝えてくれれば、次の世代に良い選手が生まれるかもしれません。そうしたサイクルを作りたいと思っています。

― 東南アジアにおける野球の未来を、どのように見えていますか。

柴田さん 現実的に言えば、東南アジアで野球を本当に人気にするのはかなり難しいことです。だからこそ、その課題をどう解決していくかが、私たちの見せ場だと思っています。野球をしていてよかった、アジア甲子園を通じて新しいキャリアが生ま



アジア甲子園の様子(写真提供:柴田さん)



一般社団法人 海外野球振興協会の皆さん(写真提供:柴田さん)

れた、選手たちが成長した―そうした声を聞けることが大きな喜びです。毎年少しずつ大会をアップデートし、最終的にはアジア甲子園と日本の甲子園がつながり、海外の子どもたちが日本の甲子園を見るようになり、野球に興味を持ってもらえる世界を作りたいと思っています。

― アジア甲子園の先に、柴田さんご自身として目指していることはありますか。

柴田さん アジア甲子園は現在、インドネシア・ジャカルタで開催し、そこにシンガポール、マレーシア、フィリピンなどの選手たちが集まる形です。私がやりたいのは、野球に限らず、日本で盛んなスポーツやエンターテインメントは素晴らしいと、東南アジアの人たちに気づいてもらうことです。最初は野球でしたが、将来的にはサッカーや駅伝など、日本で多くの人が知っているスポーツイベントを海外に持っていきたいと考えています。東南アジアの人たちが「日本のこれを見たい」「日本のこれをやりたい」と思ってくれば、さまざまな広がり生まれます。

― 最後に、南十字星の読者へメッセージをお願いします。

柴田さん 日本は『失われた30年』と言われることがあります。海外にいと、日本の影響力や日本人のプレゼンスが以前より低くなっているのではないかとより強く感じるがあります。そうした中で、「日本人はやっばりすごい」「日本はやっばりいい」と言ってもらうためには、私たち一人一人が結果を残していく必要があると思います。私にとっては、それが野球という分かりやすい形でした。仕事や生活の中で、日本人に対して良い印象を持ってもらえるような姿や結果を出すために、私も挑戦していきますので、一緒に頑張りましょう。

文責・画像:日本人会広報部部長 藤本直哉

インタビュー後記

アジア甲子園を主催する柴田さんにお話を伺い、まだ野球が十分に広まっていない東南アジアで、『甲子園』を一から作る挑戦や、それを着実に成長させている姿に、大きな力強さを感じました。私自身も学生時代から野球に親しんできた一人として、特別な意味を持つ『甲子園』がアジアに広がり、アジアとのつながりを深めていく姿を今後も見守っていきたいと考えとともに、自身の分野においても、日本人としてアジアに価値を届ける挑戦を続けていきたいと思っています。



(左から)藤本直哉 広報部部長、柴田章吾さん